

論文題目：文化交流を通じた民族融和の有効性に関する研究
—スリランカにおける国際協力機構と NPO の活動を事例として—

A Study on the Effectiveness of Inter-Ethnic Collaboration through Cultural Exchange:
The Case of JICA Projects and NPO's Activities in Sri Lanka

国際協力学専攻 2012 年 3 月終了予定

47-106777 岡本雄亮

指導教員 堀田昌英教授

キーワード：スポーツ、アート、スリランカ、民族融和、アイデンティティ

【背景と目的】スリランカは主に言語も宗教も異なる、シンハラ人、タミル人、ムスリムという 3 つの民族によって構成されており、一般的にはシンハラ人は仏教徒、タミル人はヒンドゥー教徒と分けられるが、シンハラ人の中にもキリスト教徒がおり、タミル人の中にもキリスト教徒やムスリムがいるため、非常に複雑な構成になっている。このような複雑な民族構成が引き金になり、1983 年から 2009 年までの 26 年間、シンハラ人政府とタミル人のテロ組織タミル・イーラム解放の虎（以下 LTTE）による争いが行われたが、シンハラ人とムスリム、あるいはタミル人とムスリムの間にも争いが存在していたことからムスリムも紛争の当事者であると言えることができる。2009 年に内戦は終結したものの、LTTE の残党の存在や地雷の除去、インフラの整備など課題が残っている。このような民族問題が起こっているスリランカにおいて、スポーツやアートといった文化交流によって民族間交流を促進し、民族融和を目指す動きが、独立行政法人国際協力機構や NPO などで行われている。本研究の目的は、スリランカにおける独立行政法人国際協力機構と特定非営利活動法人 AMDA による、スポーツやアートといった文化交流を通じた途上国開発が民族融和に効果があるかどうかを明らかにすることである。

【調査方法と現地調査】本研究では 2 回にわたって現地調査を行い、独立行政法人国際協力機構と特定非営利活動法人 AMDA の行っている活動にオブザーバーとして参加することで活動状況を調査し、活動に参加している生徒やその学校の教師、コーチや地域住民へのインタビューを行った。一次調査は、スリランカ人の価値観や、バレーボールが一個人に与える変化を調査することを目的として、国際協力機構青年海外協力隊の隊員が現地の学校で、バレーボールの指導をしているバンダーラウェラと、2010 年 6 月まで青年海外協力隊の隊員が 2 年間バレーボールの指導を行っていたデニヤーヤを対象地として、活動の見学や学校の教師や青年海外協力隊隊員、生徒へのインタビューを行った。二次調査は、一次調査を行ったデニヤーヤに加えて、特定非営利活動法人 AMDA が民族間交流の促進を目的として活動に参加したアヌラダプラとトリンコマリーの学校で行い、①民族紛争があったスリランカにおいて、コミュニティ間でスポーツを行うと友情や相互理解を構築し、社会的な発展をもたらす (Gasser and Levinsen, 2004; Schulenkorf, 2009; Schulenkorf et al., 2009; Stidder and Haasner, 2007; Sugden, 2006) ②3 つの民族をチーム内に混ぜてスポーツを行うと彼らの中の民族としてのアイデンティティが小さくなり、代わりにスリランカ人としてのアイデンティティが芽生えて民族の垣根を低くする (Schulenkorf, 2010) ③子どもたちを民族ごとのグループに分けると、ダンスやアートなどでは民族の特徴を出すこ

とができ、民族間の相互理解を実現できるようになる (Schulenkorf, 2010) という仮説と一次調査の結果の検証を行った。

【結果と考察】二回の現地調査の結果から、以下のような結果と考察を行った。

- a) 家族や近隣の住民といった周りの人との関係を大事にしているが、これはスリランカの歴史が複数の民族によって築かれたことから、他者を受け入れ共生していくという風土が生まれたのではないかと考えられる。
- b) 今回の調査では民族としてのアイデンティティは特に強くみられなかったが、シンハラ語もタミル語もスリランカの公用語であるのに、シンハラ人の中にはシンハラ語をスリランカ語と呼ぶ人もいて自分たちがマジョリティであるという考え方が存在していると考えられる。
- c) サッカーやネットボールといったスポーツに参加した生徒には、大会前に他民族と初めて会うためナーバスになっていた生徒もいたが、「同じ時間を共有することで自然に仲良くなった」という答えや「最後は連絡先を交換した」などからチームスポーツは、共通の目標に向かって共通のことをして時間を共有するという点で他の民族と接し交流する手段として有効なものと考えられる。
- d) 演劇に参加した複数の生徒からの「他の民族の文化や歴史が分かった」や、教師からの他民族の色彩感覚を指摘する声などから、ダンスやアートなどはそれぞれの民族の特徴を出し、民族間の相互理解を深めるようになると考えられる。

スポーツに参加することによって民族間でのコミュニケーションを取るきっかけとなり、演劇や絵画などのアートは他民族をより理解することにつながることから、スポーツやアートなどの文化交流は民族融和という視点から見たとき、有効な手法だと考えられる。

また、スリランカがこれから急速に発展しつつあるアジアの中でそのプレゼンスを高めていくためには、民族融和からさらに踏み込んだ民族融合へと進み深化させることが必要である。そのためにも文化交流の活動は同じ目標に向かって努力をし、時間を共有することからその達成に繋がると考える。

【参考文献】

- 1) Gasser PK, Levinsen A. (2004) Breaking post-war ice: Open fun football schools in Bosnia and Herzegovina. *Sport in Society*, Vol7, No. 3, 457–472.
- 2) Schulenkorf N. (2009) An ex ante framework for the strategic study of social utility of sport events. *Tourism and Hospitality Research*, Vol9, No.2, 120–131.
- 3) Schulenkorf N, Thomson A, Schlenker K. (2009) Beyond anecdotes: The development of social capital through inter-community sport events. In: Allen J (ed.) *5th International Event Management Summit: Sustainable Development and Events*. Gold Coast: Australian Centre for Event Management at University of Technology, Sydney, 435–456.
- 4) Schulenkorf, N. (2010) Sport events and ethnic reconciliation: Attempting to create social change between Sinhalese, Tamil and Muslim sportspeople in war-torn Sri Lanka. *International Review for the Sociology of Sport*, No.45, 273–294.
- 5) Stidder G, Haasner A. (2007) Developing outdoor and adventurous activities for co-existence and reconciliation in Israel: An Anglo-German approach. *Journal of Adventure Education and Outdoor Learning*, Vol7, No.2, 131–140.
- 6) Sugden J. (2006) Teaching and playing sport for conflict resolution and co-existence in Israel. *International Review for the Sociology of Sport*, Vol41, No.2, 221–240.